

# 哲學研究

第三百二十號

第二十七卷  
第十一冊

## 都市國家の成立

山内 得立

### 七

都市國家の成立は一方に都市が如何にして國家にまで發達するかを明かにするとともに、國家が如何やうにそれぞれ都市によつて形態的に規定せられてゐるかを研究すべきであり、「五」及び「六」に於て論ぜられたことはギリシアに於て最も代表的なる二三の都市について之を實證する點にあつたが、都市國家の成立はたゞこの二つの方面のみからしてはなく、さらに一つのより少からざる重要性をもつた研究によつて完ふせられねばならない。ギリシアの國家が都市を中心とすることは自らその形態を多様ならしめ複中心的ならしめた。即ちギリシアには一つの國家があつたのではなく、多くの國々が存在してゐたのである。これらの諸國家はそれぞれに獨立性をもち獨自性を備へてゐたことは勿論であり、またその限りに於て諸國家として存立し得たわけであるがそれらがさうであることはそれぞれ孤立的にあるのではなく、却つて互に密接なる關係に於てあることは恰も人間

が孤獨にはなく社會的に存在することと一般であるであらう。都市國家の成立はさらに國家間の、または開國家的なる關係に於て究明せられねばならない。それはギリシアの如く比較的狹隘なる土地に多くの國家が存立してゐた場合に於て殊に然るべきであつた。彼等はそれぞれに獨立なる國家をなしながら却つて其の故に密接なる關係に於てあらざるを得なかつた。例へばトロイへの遠征に於てアルゴスのみならず殆んどギリシア全土に互つて軍隊が糾合せられたやうに、或は歴史の時代に於てペシア軍の侵入に抗してアテナイとスパルタとが中心となり全ギリシアが同盟してこれに當つたやうに、或はそれにも拘らずこの兩國がやがて長く慘しい鬭争に——ツキユデイスの傳ふる如くその期間が長くまたその間には他に同じ年月間に起つた例がないやうな災厄を齎らしとてろのペロポネソス戰役 (Thukyd. I. 23) に入らざるを得なかつた。一つの國は如何にそれが強大であつても全く封鎖的たることができない、否それが強大であればあるほど或は他國を併呑し、外地に於て植民し味方として或は敵として何らかの交渉をもたざるを得ないのである。殊に商業とか貿易とかはそれ自らに於て對外的なる關係を本領としてゐる。ツキユデイスはギリシアの幼稚なる時代から高き文明へは發展を、弱き (ἀσθενεια) から力 (δυναμις, ισχυς) への推移として把握せんとした、やうしてギリシア人の弱さの原因を諸國家の孤立性に於て見ようとした、そこには未だ Emporia (commercio) & Epinixia (commercium) もなくたゞ Auxilia があるのみであつた、そこには未だ十分なる、否不十分なる程度に於てまづ πλοῦτος (Wealth) がなかつた。土地はそれによつて生活するだけの必要に於て利用せられ海は海賊に脅かされて安全ではなかつた。この弱さの外徴は富と所有との缺乏であつた。かくの如き状態から脱して力と所有との獲得にまで到らしめたものは人と人と

の、または國と國との相互の交通であり、土地を耕して穀物を植え果實を收獲するともに、海を互つて他國と交易し、海賊を征して外地に植民することであつた。Minoは既に早くより船を浮べて海を征服しキクラデス諸島を支配した。ツキユデイデスによればアガメムノンの支配もこのミノス的な支配であるに外ならなかつた。ギリシア人の中で後の時代の仕方に於て始めて海を征服したものはコリントス人であつた。三段桅船が甫めて建造されたのもコリントスに於てであり、サモス人の爲に四隻の船を造つたのもコリントスの大工アメノクレスであつたといふ。我々の知つてゐる最古の海戦もコリントスとケルキュラとの戦でありそれはペロポネソス戦役よりも約二百六十年前に戦はれたものであつた(Thuk. I. 13)。コリントスと並んで早くから營業に乗出したものはアイギナ人である、アイギナの商人は萬賣捌人(ἑταίροι)であるといはれたのも如何にこの島の人々が商賈的であつたかを示すものであるであらう。ヘロドトスはアイギナの人 *Boeotians* を他に比肩し得る者のない程の富豪の代表者として引用してゐる(Herod. IV. 152)。また彼はアイギナ人が如何にして富をなしたかについで次の如き逸話を傳へてゐる(Herod. IX. 80)。プラタイアの戦後、パウサニ阿斯に率ひられたギリシア軍がマルドニウスのペルシア軍を撃滅し夥しい戦利品を得て之をアイギナ人に賣つたものであるが、アイギナ人は金を青銅であるかの如くにして買ひ巨富を利したといふのである。アイギナ島はエポロスも言つてゐるやうに(Græko 8, 6, 16)土地が碓礮であつたがために住民は多く海上に出て商業に従事した。フェニキアの商人と肩を比べて雄飛したのはギリシア人の中でも殊にアイギナ人に多かつたのである。アイギナには多く陶器を産した、また青銅の産出に於ても有名である。彼等はこれらを携へ遠く海を渡つて商戦をエーケ海に展開したのである。

しかしギリシアに於て單に商業上のみでなく政治的にも力をもつて早くから海上の王となつたのはいふまでもなくコリントスであつた。そこでは僭主政體の没落後全く商業または工業都市となつたのみでなく政治的にも早くから多くの植民地をもちそれらを通して世界に雄飛せんとした。ケルキュラを初めシケリア、アカルナニア、アエトリア等を占領し、アムブラキア、レウカス、エピダムス、アポロニア、ポテイダエア等をもその領内に所有してゐた、そしてホメロスをして、ギリシアに於て最も富めるコリントスと稱へしめたのみでなく、巨大なる海軍力はアテナイの勃興以前に於て一大海上國を出現せしめたのである。否アテナイと雖もアイギナと戰を交へたときコリントスから船二十隻を譲り受けねばならなかつた(Herod. VI. 89)。五世紀になつても戰艦の建造にかけてはコリントスが依然として第一人者の位置を失はなかつたといはれる。傳説的なコリントス王 Amphidamas は戰ひながら舷側で死したといふのはよく海軍國たる此市の面目を表はしたものといへるであらう。海賊を退治して航海を安全ならしめたのもツキユデイスのいふ如く主としてコリントス人の功業であつたであらう。コリントスでは工業は盛んではなく僅かに美術品の製造に止つたが (Francois: *Industrie dans la Grèce antique*, vol. I. 103 参照) その地がペロポネソス半島のギリシア本土につらなる地峽部に當り、商業交易に於ては全く天與の地利を占め、フランコットもいふやうにこの都市の盛衰は全く商業の隆替に懸つてゐたのである。

しかしこの時代に於て全く産業から遊離した商業といふものは一般に不可能であり、コリントス人についても、彼等はギリシア中で最も技術者を輕蔑しなかつた國民であるといふことが傳へられ、ヘロドトスも、リビア

のアウセエス人の間では毎年のアテネ祭にその國の乙女達が二手に分れて石と棒とを以て闘ふ風習があるがその前にそれらの中最も美しい乙女にコリントス兜を着せて戦車に乗せトリトニス湖の周囲を伴ひ巡る行事のあることを記してゐる (Herod., IV. 180)。この兜が果してコリントスに於て製造せられたか又はたゞ彼等によつて運輸せられたのみであるかは不明であるが、リビアに到るまでそれらが商品として賣られてゐたことは確かであらう。一般に當時の商業都市は同時に何らかの産業をもつてゐた、例へばミレトスは小アジアに於ける有名なる商業都市であるがそこはまた繊維工業の中心地でもあつた、羊毛、緞通、其他衣類等がそこから産出せられた。また多くの陶器類がミレトスから *Naurints* に輸入せられた。ナウクラテイスは初めミレトス人によつてナイル河畔に建てられた植民地であつたが後に通商の發展とともに全ギリシア人の植民地となり、埃及との商業は主としてこゝで行はれたのである。

ギリシア本土に於てはコリントス、アイギナ及びアテナイが、小アジアに於てはミレトスが、埃及に於てはナウクラテイスが當時の交通商の中心地であつた。さうしてこれらを通してギリシアと小アジアとが、及びその後にあるアジアの國々とが交通せられ、或はギリシアと埃及とが、及びそれを通じてカルタゴやマツシリア (マルセイユ) と通商せられるに到つた。しかし我々の茲に注意せねばならぬことはかくいへばとて此等の諸都市が今日我々のいふ意味に於て商業都市であつた、その市民は近代の商業人であつたといふことが出来ないといふことである。我々の言はうとするのはたゞ此等の事實を通してギリシアのポリスが孤立性を破つて *Epimixia* または *Emporia* の状態に達したといふことであり、或はこの *Epimixia* を無視してはポリスが成立し得ないといふ

ふ事實である。嚴密にいへば當時の世界に於て純粹に商業を營んだものは——營み得たものは専らフェニキア人であつてギリシア人でなかつた(Hasebroek: Staat und Handel in alten Griechenland, S. 67)°。ギリシア人はその古き時代に於ては商業人であるよりもむしろ農耕人であつた(Hasebroek, S. 73)°。ギリシア人が民族をあげて接壤地に移動し、海を渡つて外地に植民したのは必しも商業・交易のためにはなく、もともと耕地に乏しく地味瘠せたギリシアから肥沃なる農作地を求め豊なる收獲を追ふて進出したものであり、或は勇敢なる國民性から敢えて危険を冒さうとしたものも多いのである。殊に當時の商業はハーゼブロエクも明晰に論じたやうに非常に制限せられたものであり、殆んど個人商業(Eigenhandel)ともいはるべきものであつた。陸路は交通が不便であり、海上は海賊に脅され、船腹は勿論不足であり、運賃が高く、危険率は極めて大であつた。マケドニアからアテナイへ小量の材木を運搬するのに千七百五十ドラクマを支拂はねばならなかつたと傳へられてゐる。ニコストラトスといふ人は逃亡した奴隸を追ふて海上に出たが却つて捕へられてアイギナに賣られたとも傳へられてゐる。前四世紀頃になつてさへ船が安全に航海し得るのは四月から十月初までの六ヶ月間であつて冬期は全然不可能であつた。殊に當時の商人にとつて最も大なる打撃は何處に於て如何なる商品を賣り、または買入れ得るかを前以て熟知することが困難であつたことである。凡ては偶然的であり不定であり不安であり、危険に伴はれてゐる。ナウクラティスの Kleonenes の如き有力者は代理店制度をとつて幾分この危険を征服したといはれるが多くの商人は勿論かゝる制度をもたず資本もなく信用制度の發達しない時代に於ては商業は多く個人的な、または地方的な小規模のものに終らざるを得なかつた。Kapols といふのが即ちこれである。彼等は自己

の居住地を離れず郷里の市場で商賣をする人である。プラトンの言つたやうに (Politika 371) 彼等の任務は市場にあつて、ものを賣らんとする人に品物に換へて金を與へ、物を買はんとする人から金を取るだけのことにはない。商品が直接に製産者からではなく他の商人から來る場合にはそれを取扱ふ人は *Polin-Tayolos* として區別せられた。カペロスはそれ故に必しも小賣商人 (*Metabolens*) を意味しなかつた。大量の卸問屋であつてもそれが住居を離れないで地方的に止つてゐるものがカペロスであつたのである。

ギリシアの商人にはこの外に *Nankoros* と *Fanporos* とがあつた、そしてこれらは郷里を離れ一地方から他の地方に移り、殊に海を渡つて商賣する人々を意味してゐた。カペロスが *Tokalandler* であるに對して此等は *Fernhandler* であつたのである。この中ナウクレロスは自ら船舶を所有し、それによつて又はその中に商業を營む人々を言ひ、エムポロスはもとは單なる渡り者であり他人の船舶を借りて商行爲をなす人々を意味してゐた。エムポロスはそれ故にまた *Epibatos* ともいはれ、それは明に或地から他の地へ渡り歩くものの意であつたのである。アリストテレスはこの商人を *Portegie* 即ち商品運搬者として規定してゐる (Aristot, Pol. 1258<sup>b</sup>)。しかるにギリシアに於てはこのエムポロスが一般的位置を得るやうになり、ナウクレロスもエムポロスの一種として考へられるやうになつたことは商業の本質が何處にあるかを明示するものとして興味深いであらう。エムポロスとは商品を製産者からまたはカペロスから買つて外國人に賣りつける人々の謂ひであつた。彼等は出来るだけ多く商品を仕込むのみでなく、あらゆる方面に渡つて廣く之を賣捌かうと企てる、彼等にとつては自國が、または一地方が唯一の販路ではなく、廣く遠く海を渡つて到る處に市場を獲得せんとした。さうしてこ

のことは商業がそもそも國內的ではなくむしろ國と國との間に於て行はれるものであるべきことをあらはしてゐる。ポリスの國家形態は差別的であり排他的であるが、その經濟狀態は間國家的であり、共通的でなければならなかつた。ツキユデイデスにとつてもエムポリアが即ち *Epiphixia* を意味してゐた、互に孤立的なる都市國家はエムポロスによつて *Anixia* の狀態から免れて、人と人とのまたは國と國との交合に入り得たのである。古代ギリシアの商人はカペロ斯的であつたが商業の本質はエムポロスにあることは認められねばならぬであらう。

のみならずギリシアに於て商業に従事するものは多くは平民またはプロレタリアであつて貴族またはブルジョワではなかつた。殊にアテナイについていへばナウクレロスもエムポロスも殆ど外國人にしてその市に住む人即ち *Metoiikos* であつて市民ではなかつた。このことは大に注目に價する事實である。なぜならば商業が正當なる市民の職業でなくして却て外人の占有するところであつたことは商業そのものが本質的に間國家的たらざるを得ぬことをあらはしてゐるからである。ギリシアの商業は勿論未だ資本主義的機構を有せず、商人は決して同時に資本家ではあり得なかつた。カペロスもエムポロスもアゴラーの民衆 (*aristoiotai dynastoi*) に屬し、彼等はグノリモイ(名ある人々)に即ち富める人々や貴く名ある人々に鋭く對立してゐた。彼等は大工や靴工や農夫や其他アゴラーに集つてくる種々なる種族の人々と同等の位置に置かれてゐた。彼等は一般に教養のない人間として印しづけられ尊敬に價しない人々として取扱はれてゐたのである(Platon: *Nomoi* 918<sup>o</sup>)。

メトイコス は外國人にしてその都市に住む人々である。彼等にも種々なる種類があり、或は船の出帆まで一時的に假寓する人もあり、或はかなり長くではあるが永住の志をもたぬ人もあつたが、しかしそこに住みついて骨を埋



めようとする人々もあつた。それは多く *μέτοικοι* と名づけられるが時として *οἰκογενεῖς* 又は *κατοικοί, στρατοί* と呼ばれたところを見ると外來人であるが既に都市の住民に編入せられたもの即ち *οἰκογενεῖς* の一部をなす人と考へられてゐたやうである。アテナイでは四世紀頭に市民二萬一千人に對し一萬人のメトイコイがあつたといはれペロポネソス戦役の初めにはその數が市民の三分の一に達してゐたと傳へられてゐる (Busolt: *Griechische Staatkunde* 294)。メトイコスの權利については各都市によつて異つてゐるがアテナイに於ては一定期間住居したのち市民を證人として届出て一定の金を拂つて外住者として認められることを必要とする。彼等は一つのデモスに屬してゐるがしかしその一員ではなく、たゞその地區に住む權利が認められるにすぎない。彼等は人頭税を納むべき義務ある點に於て一般の市民から區別せられてゐた、アテナイではそれは年十二ドラクマでありそれを支拂はないまたは支拂ひ得ない外住者は奴隸に賣られたといはれる。特殊の事情のもとに、または一定の條件の下に彼等に對して市民權が與へられることがあつた。例へば戰爭に於て殊勳を立てた人とか國庫に對して多額の獻金をした人々などである。彼等にはまた *Atoloi* と *Isotoloi* とが與へられることがあつた。前者は人頭税の撤廢を意味し後者は市民と同格なる納税の義務である。そしてそれはメトイコスからの離脱をと共に殆ど市民と同じ權利に於て認められることを意味するのである。嚴密にいへばそれは市民とメトイコスとの中間にある階級であつた。さうして早くから各都市にはかゝる新しき階級が増加しつゝあつたのである。ナウクレオスとエムボロスとからなる商人は實にかゝる階級に屬してゐた。フランコットも明説したやうに「アテナイの海上通商は殆んどこれらの外來人の手にあつた」(Francois *op. cit.* p. 19)。殊にアテナイの穀物賣買は殆どメトイコスの手

に握られてゐたやうである。さうしてこのことは特殊的にはなく、ギリシアの經濟界を通して一般に見らるる現象であるとするならば商行爲を通してこれら外來者のなしとげたエムポリアへの寄與は蓋し尠からざるものがあつたといはねばならぬであらう。ソロンはこの意味に於てメトイコスのアテナイ移住をむしろ歓迎した。Polykrates も高い報酬を拂つてこれらの商工者をサモスに呼び迎へたと傳へられてゐる。メトイコスはポリスの木質からは引離すことのできないものとなり遂には *επιτοπος* と *μετοικος* とが同意義を擔ふやうにさへなつたのである。多島海通商の中心であつたデロスでは商人の殆んど凡てはギリシア人の、またはギリシア人以外のメトイコスであつたと傳へられる。土地を耕し衣食の料を供給するものが奴隸であるとするならば製品を運搬し有無を相通するものがメトイコスであつた。この點に於て彼らは奴隸と並べて市民の外に置かれ公職に就くことも許されなかつたが（テーパーイに於ては市場の業務から足を洗つて十年を経たものでなければ公職に就くことができぬといふ法律があつたといふ）(Arist. Pol. 1278)。しかしギリシア諸都市の富強にこれら市場人の寄與するところ如何ばかり多かつたかはいふまでもなく諸都市の相互的關係は實にこれらのメトイコスによつて開かれたのである。古代ギリシアの商業はカペロスの性格を帯び、種々なる事情の下に自國內に止る傾向をもつてゐたが、商業の本來の性格はアリストテレスのいふやうにいよいよ外國的になること (*ἐξωτερικὸν ἦν ἔργον*) にあるとすれば (Arist. Pol. 1257) もともと外國人であつたメトイマスがそこに如何なる役割を演じたかも明白であるであらう。彼等は外國から來り住んでゐる人々であつた、彼等は故郷をもたぬ人々であり、如何なる國家にも屬しない人々 (*ἀπολλυμένους*) であつた、さらに彼等は全部ではないが大部分はギリシア人でなく所謂バルバ

ロイに數へられる人々であつた、或はリデア人でありブルギア人でありシリア人であり又は多種なる異國人であつた。彼等は前述の如く或都市に住み着くことによつて種々なる權利を得、時として新しき階級を作るまでに定着することもあつたが、しかし決して全き市民 (Vollbürger) とは遂になり得なかつた。ギリシアの市民は強く都市と國家とに結びつき、それを外にして生活も思想もなかつたのに對しメトイコス は本來的にこれらの束縛から脱して超國家性をもつてゐた、一言にしていへば彼等の生活はポリス的であるよりもコスモポリス的であつた。さうして此等の人々が本來的に人と人との國と國との間に行はれる商行爲を得意の活動場面とすることは餘りにも理の當然であるといはねばならぬであらう。このことは一方に商業がギリシアのポリスにとつては外的のものであることを表すとともに、ポリスは商業の發達とともにやがてその形態を變革しなければならぬやうになることを意味してゐる。ギリシアの市民は文字通りにポリスの住民であり *homo economicus* であるよりも *homo politicus* であつた。さうしてその限りに於て彼等はポリスの生活をつゞけて來たのであるが、ポリスの成立がやがて他のポリスとの接觸をもたらし、單に政治のみでなく經濟的なるものがその基礎をなすに到つてその形態を變革せねばならなくなつた。ポリスからコスモポリスへの展開が即ちそれである、さうしてこの變革を敢へてせしめたものがメトイコスであつたのである。

## 八

都市國家はそれぞれの都市がそれ自らに國家をなし、従つて單一ではなく複數であることを性格とするが故に

その成立はこれらの諸國家の間にあつて如何なる位置を占むるかによつて規定せられるのである。我々はこのことを討ねて第一に間國家的なる通商の問題に達着した。通商は一つの國を他の國に交渉せしめ、そこに國家間の關係を成立せしむるものであるが、それはいふまでもなく經濟的行爲であつてそれを司るものは商人たるメトイコスであつた。國家はこの外に *homo politicus* として互に如何なる關係をもつべきであるか。ポリスにとつてこの問題はさらに重要性をもつてゐるといはれねばならぬ、なぜならポリスの本質はいふまでもなくポリテイコスの場面にあるべきであらうから。

さてこの方面から見ると都市國家は明かに排他的であり自守的であり鬭争的である。一つの都市はその獨立性を守るために凡ゆる努力が拂はれ、時として他國の犠牲に於てさへそれが要求せられる。戦ひは建國の始めに於て既に見出され國家の成立過程に於ても常に見られるところのものであつた。戦は萬物の王であると喝破した哲學者の言を茲に引き出さぬまでも、平和はむしろ戦ひの僅かなる休止であるにすぎぬとも見られ得るであらう。プラトンもモイの初めに「凡ての人が生涯絶えず互に戦つてゐるといふことを見ない人は愚である」といひ「人が一般に平和といふのは單なる名にすぎない、實際は凡ての都市が互に戦ひつゝあるのが自然の状態である」(Platon: *Nomoi* 625-626)と重ねてゐる。一の國が政治的に他の國家に對するとき征服であるか服従であるか對等の關係に於てあるかの孰かでなければならぬことは常識であらう。古くはエテオクレスはポリネイケスと既に母の胎内に於て争つたと象徴的にいはれてゐる。ラケダイモニアのドーリア人は豊なる土地の望ましがためにメツセニア人を滅した。アルゴスを征伐したスパルタ王クレオメネスはアポロンによつて欺かれたのではないか

と疑つたほどに理由をもつてゐなかつた(Herod. VI. 180)。ギリシアでは多數の國家が對立しそれぞれ自主的であつたからその間に鬭争のたえなかつたのも自然の理であらう。ギリシア人は個人の自由と獨立と正しき名とを何よりも尊んだ人種であつたから彼等は互に争はざるを得なかつた。我々はこれを彼等の *agonal* な性格として特徴づけることができる。*ἀγωνία* はアゴラーと同じく第一に人々の集ることを意味するが人間の集るところに必ず競争の意識が生じる。競技はギリシア人の最も好むところであり彼等をして全國的に集合せしめ汎ギリシア的な會合を成立せしめるものであるがそれは互に競争することを通じてであつた。戦ふことはそれによつて却つて人と人との或種の關係を生ぜしめる所以のものであるからである。ギリシア人は單に戦ふといふことにのみでなく如何に戦はるべきかといふことに重點を置く人間であつた、そしてそれはまさしく競技の精神の中に横るところのものである。戦鬪の中にも彼等にとつては常にこの精神が働いてゐた、それは戦ひが彼等にとつて競技であるといふ意味ではない、戦ひの中にも常に主體的なるものが中心となつてゐたといふ意味である。プラタイアの戦に於てスパルタ王パウサニ阿斯はアテナイ人に次の如くいつた「アテナイ人よ、ギリシアが自由を享受するかそれとも奴隸となつて屈するかといふ目前の戦に……」と。そしてヘロドロスはこの戦ひを言表すに *ἐπιπορευόμενος* と云ふ語を用ひしめる(Herod. IX 60)。彼等はヘルシヤ軍との戦ひに於ても常にかくの如き意識に於て戦つてゐた。彼等にとつては戦ひが如何なる結果を齎すかよりもかくの如き意識に於て戦ふことそのことが貴かつたのである。我々はこゝにクレオメネスとパウサニ阿斯との差別をとともに一脈の相通するギリシア精神を見ることができであらう。前者はたゞ戦ひのために戦つたのであるが後者は戦ひを通して徳を實現せんとし

た。しかし兩者はともに戦ひの齎すところのものに懸念しなかつたのである。戦ひの中に人間の徳が培はれるといふのが彼等の信念であつた。戦を通じて人間のアレテーを生長せしめんとするのが彼等の望みであつた。恰も競技はそれによつて賞品を得るよりも正しく勇ましく争はるべきことを生命とするが如きであらう。ギリシアに於て競技が如何に喜ばれその精神が如何に尊ばれたかは周知の事であるであらう。オリムピアやデルポイに於ては勿論多くの所にそれは盛に行はれた。それが競技である以上人々の間に力の相互的な計量についての喜びはあつた。人々は互に勝ち、すぐれまさらんとした、*agonismos*とか *agonismos*とかいへれるのはこの精神である。即ち彼等は何事につけても第一人者たらんとした、それは人間の旺盛なる生活力の自らなる發現であり、生きんとするものにとつて一つの徳であらねばならぬ筈である。*aristos*とは必しも貴族を意味しない、貴族とは特權と當に名譽とを有する種族を意味しはしない、それは文字通りにアゴーンに於て第一人者となつた人である。*aristos*とはさらに人と人との、國と國との間に於て客觀的にも特殊なる位置を占めることである。従つてそれは *agonismos* よりも強く、社會的なるまたは政治的なる意味をもつてゐた。クセノポンの傳ふところによればスキュオンの市に *Thyrrhon* といふ人があつた、彼の名聲はラケダイモニアに響いてゐたが彼はそれに満足せずさらに他の國に於ても第一人者とならんことを望んだといふ (*Xen. Hell. VI. 1*)。人間はかくの如き名譽心に驅られて屬、誤るのであるが優れたるものへの努力はそれ自らとしては必しも惡徳ではないであらう。それはアゴーンであつても決して *agonismos* ではなかつた、アトレオーは何かを獲んとして争ふものであるがアゴーンはたゞ勝れんとする意識に根ざしてゐるからである。

アゴーンはこの意味に於て争を通して人間の持ち得る一つの徳であるが、さらに我々にとつて重要なるはその齎らす結果についてである。前にもいつたやうに *strife* はアゴラーと相通するところがあり、それによつて人々の結合が齎されるところのものである。競技は人々と争ひ人々に勝つことを目的とするが故にそれは必然に人と人との間柄に於て成立つべきであらう。オリウムピアの競技がパンヘレニステイクであり、それに参加する人々はギリシアの全都市を網羅してゐた、いはゞ封鎖的なる都市國家はこの競技によつて打つて一丸とせられたのである。各自の國家を峻別したギリシアは一方に於てこれらを糾合する機會に餓えてゐたともいへよう、彼等は熱情を以てオリウムピアの競技に参加し歡喜に溢れて勝敗を争つたのである。都市國家間に互に對立したギリシアに於て凡てが一團となつて或は喜び或は歎いたのはこの競技を描いて外にはなかつたことも容易に推察し得るところである。オリウムピアはこの意味に於て一つの國際的なるアゴラーであつた。それは争ひを通して人心を糾合する一つの結節でもあつた。ポリスはこゝに於て語の特有なる意味に於てのコスモポリスとなり得たのである。ポリスからコスモポリスへの移渡は茲に於ても見られ得るのである。争ひは人と人との對立を險しくするが争ひは必しも人間の憎惡から出るとは限らない、それはいはゞ美しき戦ひであり神を通しての争ひである。オリウムピアの競技が神を中心としたことも決して不思議ではないといはねばならぬであらう。アゴーンは *agonie* に通じ苦悶を意味する、戦ひは正に苦痛であり悲惨である。何れの戦ひと雖も快く樂しきものはない筈である。しかし *agonie* は必しもアゴニーに發展すべき必然性をもつてゐない、ギリシア人が戦争に於て極めて明朗であり潤達であつたことはアゴーンの原意を失はなかつたからである。彼等は戦争に於て尙競技の精神を發揮した。へ

ロドトスの傳ふるところによればパイオニア人とペリントス人との戦ひに於て三種の一騎打か兩軍の間に行はれたといふ、即ち人と人と、馬と馬と、犬と犬とがそれぞれ互に格闘しペリントス人の方がその中の二つに勝利を博したので彼等は歡喜のあまりパイオンの喊聲を擧げたといふ (Herod. V. 1)。

アゴーンはまた *áron* といふ動詞に關係を有し、人を牽いる、指導する、支配する意にも通ずるところからしてそれは Hegermonie の問題に我々を導くであらう。ヘゲモンは單に一人の敵と戦ふのではなく、多くの人々の間にあつて特に優越なる位置を占むることである。アガメムノンはギリシアの諸王をその傘下に集めてトロイの遠征にまで誘導した、彼はこの戦ひに於てヘゲモンであつたのである。スパルタ王はペロポネソス同盟に於て牛耳をとつてゐた。彼は *Barkheús* とよばれるよりも *árekhon* τῆς Πελοποννήσου と呼ばれることが多かつた。

それはスパルタが外國と事を構へること多く、そしてそのとき王は國民の *Führer* として立つてゐたからであらう。ヘゲモンはそれ故に將軍 (*στρατηγός*) と同じ意味をもち、またテッサリアの *ἡγεμόν* と略同様の意に用ゐられた。

スパルタの住民について注目せられるべきことは *Periokios* の存在であらう。それはラコニアの地に特有なものであり、恰もアテナイに於て *metoikos* がさうであつたやうにスパルタの國家に於て特異なる位置を占めてゐた。ペリオイコスとは文字上は周圍に住む人であり、スパルタの周邊にそれぞれの都市をなして住んでゐた人々をいふのである。彼等は決して奴隸 (*Heloten*) ではなく自由民であるが、スパルタの市民でなく彼等自らの仕事に従事しつゝスパルタに隸屬しそれに納税し兵役に服する義務をもつてゐた。カールステッドはペリオイコスと



スパルタの關係は一種の「誓約」に於て成立してゐるとしてゐるが (Karstedt Griechische Staatsrecht S. 75) 彼等とスパルタとの關係は歴史的に多くの問題を殘してゐる、しかし我々の茲に言ひ得ることはペリオイコスが存在が單なる屬領からヘゲモンへの從屬へ移るべき過程を示してゐるといふことであらう。彼等はスパルタと結んでゐるが全くの屬國ではなく、それぞれの都市をもち一つの政體をなしてゐる。しかしそれと同時に彼等は純粹の獨立國ではなく時として統治者を缺いてゐた。後にスパルタは之等のペリオイコスに *Hannosta* (總督) を置いて統治したのを見てもそれが獨立國の完全なる條件に缺けてゐたことが分るのであらう。彼等は全くスパルタと共に戦ひ運命を共にしてゐた、ペロポネソス戦役第八年に *Kythira* (スパルタのペリオイコス) が如何にアテナイ人と戦つたかをツキエディデスは傳へてゐる (*Thuk.* IV. 54)。スパルタのペリオイコスとしてはその外メッセイニアの *Kyparissia*, *Methone*, *Thuria*, タナイロンの近邊は *Alagonia*, *Gerania*, *Louktron* 等マンア、及パロンの半島は *Akratai*, *Asopos*, *Boiai*, *Tyros* 等があつた、ちうしてこれらはツキエディデスによつてペリオイコイのラケタイモニア人 (*Lakedaemonioi τῶν Πελοποννησίων*) とよばれてゐた、いはゞ此等はスパルタのコスモスを構成する諸星であつたのである。彼等は多くドーリア人によつて住居せられてゐたが決してスパルタの植民地ではなかつた。植民地 (*ἀποικία*) の性格については後に明かにしたい點であるがペリオイコスは植民地とも異なるのである、ギリシアの植民地は近代のそれと異り單なる母國の屬領ではなく、既にそれぞれ都市國家をなしてゐるのであるがペリオイコスはそれにもました一つの都市を形作つてゐた。それらはそれぞれ一つの世界をなしながら更に大なるコスモスに屬することは太陽系に於ける諸星の關係と同様であるともいへるで

あらう。我々はここに國と國との一つの新しい關係を見定めることができる。カールステッドの如く之を條約の關係と見ることは行き過ぎであるとしても少くともそれへの過渡を見出すことは誤りではない。

多くの歴史家の説によればスバルタの外戦は *Tegea* との戦ひから一變したといはれる。從來の方針はメッセイニアにしろアルゴスに對してにしろ敵を殲滅しその領土を奪ひとるにあつたが、テゲアとの戦ひに於てスバルタは妥協的に休戦して之と條約を結んだ、我々は茲にギリシアに於ける國際關係の原理的なる一つの段階を見るのである。スバルタのペリオイコスに對する關係は單なる屬領に對するそれではなく、いはゞ彼等に自主權を認めながら尙そのヘゲモニーを取るところにあつたが更に一步を進むと對手の國に同等なる權利を認めながら之と聯盟する立場が發展しなければならぬ。スバルタとテゲアとの關係は正にそれであつた。茲に於て所謂同盟とか聯盟とかの問題とならざるを得ぬこととなつたのである。

同盟は國と國との關係について友好的であり平和的であるがしかしその起源はむしろ戦ひとアゴーンとにきざしてゐる。即ちそれは第一に攻守同盟であり共に戦ふこと (*Synachia*) を目的としてゐる。戦ふことなしには互に援助し共に協力する必要が危急的には見出されぬからである。しかし同盟は勿論戦ひの状態ではない、それは戦ひを前にしての友好であり戦を後に控へての平和である、いはゞ戦争と平和との混合に於てそれは成立つとも考へ得られるであらう。聯盟の國際的なる性格はしかし何であるべきであらうか。

## 九

國と國との *interpolis* 的な關係を求めて我々は第一に商業的、經濟的なる *Emporia* に於て見出しそれを擔ふものとして主としてアテナイに見出されるメトイコスを點檢した、次に戦ひを中心としてスパルタのペリオイコスが如何にこの問題に寄與する所あつたかを檢討しようとした。 *metoikos* も *parioikos* も共に *oikia* であり人間の共に住み (*synoikia*) 一つの都市國家を形成することにあづかつてゐる。シュンヨイコスは人と人との共同生活であるが我々の今の問題は國と國との共通關係に關聯してゐる。しかし國と國との關係も人と人との關係と原理的には異つたものではないであらう。國際的なる同盟は人と人との、殊に自國人と異邦人との關係にその起源をもつてゐる。ギリシアに於ては他國人は一方に於て *barbar* として忌嫌ひ輕蔑する風習もあつたがまた同時に賓客として之を好遇することが一つの美德として重んぜられた。外來人はその國に於て見知らぬ人であり力なき人であり、時には恵みを乞ふ人でもあつたから之等に同情し庇護し、援助を惜まないことはたしかに人間の一つの美德でもあつたらう。早くから知識をまたは生活を世界に求めたギリシア人は異邦の目新しく優れたるものに對し好奇心をもち尊敬をさへ拂つたことも自然であるであらう、オデウセウスが漂泊の處々に受けた苦難をと共に好遇と歡待とを人々はホメロスからして十分に讀みとることができる。異邦人が優れたる學說と批判力をもつて登場することもプラトンの會話篇に於て屢々、我々の遭遇するところである。ギリシアではこの意味の外來人を *xenos* をよんだ、其れが國家的であり公的である場合には *pro-xenos* とよばれた。プロクセノスは國家を代表するが、それを行ふのは個人であるからしてそれらは人間の友愛の徳を表はしてゐる。この徳がポリスの原理として如何に働くかはまた別に論ぜらるゝところがあるであらう。茲ではプロクセノスが國家間の友好關係に

何をなしたかを瞥見するに止めよう。それは國際關係が單なる武力によつてではなく何らか新しき方法によつて解決すべく要求せられたとき又は所に於て屢、用ひられた。普通にはそのために派遣せられたる使者をいふのであるが、時として他の國に於ける自國の同情者を意味することもあつた、例へばアテナイに於けるキモンの如きがそれである。彼はペリクレスと覇を争つた政治家であるが常にラケダイモニアの友でありアテナイ人の過失を戒めんと欲して演説するとき、いつでも「ラケダイモニア人はさうは爲ない」と叫んだと云ふ (Plut, Kimon)。アテナイとスパルタとの關係はキモンによつて著しく増進せられたがペロポネソス戰役の勃發するに到つて全く没落した。しかしこの戰爭の中にも兩國の和交を調整しようと試みる人の絶えなかつたことは例へば Kallias の如き人が出たことを見ても分るであらう。

クセニアとプロクセニアとの外に、異邦人の形式として Hikes があつた。これは前者が賓客としてまたは國賓として遇せられたのに對しむしろ惠を乞ひ救を求める人々であつた。アイスキュロスの劇 Hikes はこの最も美しくしかも哀れなる場面を描出したものとしてこゝに思ひ起されてよいであらう。この劇に登場する人物は迫害に堪へかねて埃及より免れ來つたグナオスの娘達である。彼等は手に羊毛を捲きつけた橄欖の枝を携へ (それは惠を乞ふもの儀禮であつた) ズエウスの子孫であることを唯一の理由としてアルゴス王ペラスゴスに救援を乞ふたが王には突然の事として早速の決心がつかぬ、若し彼等の乞ひを容れんか埃及と戰端を開かねばならぬ、しかし之を無下に却けんか客をもてなす道にはづれ Zeus Xenos の怒を招くにちがひない、彼等は殊に埃及人であるとはいへツエウスの子孫である、王は之をアルゴスの市民達に訴へて遂にその同意を得、彼等の願を

容れることとなつた。

國と國との聯盟にも種々なる様式が見出されるであらう。第一はこの *Hilotes* の關係である、それは外國から強力なる侵襲をうけたとき自國の微弱なるために他の有力なる強國に救援をこひ、それが容れられて同盟が成立する場合である、いはゞそれは國家的なる *Hilotes* であることは明かであらう。例へばエレクトリア人が波斯軍の侵寇にあつて遽にアテナイ人に救援を乞ふたやうな場合がそれである (*Herod. V. 100*)。彼等はたゞ自國の存亡に際して有力なるアテナイに救助を求めたのであつた。アテナイ人はこのとき任侠的な態度をもつてこの願ひを容れ、カルキスの騎士階級の土地を采領として與へられた四千人を援軍として送り共に戦ふべく命じた。しかしこの同盟が正しき自覺に基いてゐなかつたことはエレクトリアの態度によつても分るであらう。彼等はアテナイ人を呼び迎へて置きながら心中では二種の考を有つてゐた、即ち彼等の一派は都市を放棄してエウポイアの高地へ走らうと考へてをり、他の一派は波斯王に内通して漁父の利を得んことを期待して、裏切る用意をしてゐたといふ。エレクトリアの態度は何ら正當なる同盟の意識に出てゐなかつたといふべきであらう。自國の危急に際して強國に頼ることは孰れの弱小國に於ても常套手段であり、憐みを乞ふものに救援の手をさしのべんとするのは却つて強大國の自負心に媚びるものであるとも見ることができるといふであらう。

これに反してペルシア戦争に於ける汎ギリシア的なる同盟は全く自覺的なるシユムマキアであつた。そこに於て人は初めて正當なる同盟について語ることができ、たゞ偶然的なる任侠によつてはなく、自覺せられたる愛國心から出た同盟の形態を見ることができるのである。併しそれは未だ政治的であるとはいへぬであらう。なぜ

ならそれは積極的なる攻撃を目圖するのではなくたゞのしかかつてくる大なる脅威に對する反撥を主としてゐるからである。ヘロドトスはそれ故にこの同盟を *epivolutai* としてシイナイキアとは區別した (Hortl. VII. 148)。ツキュデイデスも同盟のかくの如き形態をあらはすに *synagkha* と云ふ語を用ひてゐる (Thuk. I 18)。それは單なる同盟でなく *defensive alliance* と譯せらるべきであらう。しかしペルシア戦争はギリシアにとつて東方の脅威に對する自衛であつたのみでなくアジア的なるものと西歐的なるものとの、即ち東西文明の抗争史の第一頁を飾るところの事件であつた。當時のギリシア人にとつて勿論それほど自覺は見出されなかつたとしても東方の大なる進撃に對しては自ら此れに通ずる意識がなかつたとはいへないであらう。この意識はスパルタの下にペロホンネソス人が脱退した後にもアテナイを盟主とするギリシア軍の間に尙強く生き残つてゐたことは明かである。近代の歴史家はこの點を強調して、さらに強固なる同盟がアテナイとその他の國々との間に締結せられたやうに云ふが、果してそれが同盟の新しき形態にまで發展したか否かは疑問であらう。事實はたゞアテナイが尙戦ひを続け、脱退したスパルタも依然として他のギリシア人との同盟を失はなかつたといふに留るであらう。

同盟の純粹に政治的なる形態はアテナイがスパルタと決裂したのちアルゴス及びテッサリアと結んだところに見られ得るのである。アテナイはそのときギリシア本土に於て全く孤立的であつた。アテナイがスパルタの年來の仇敵たるアルゴスに結びついたのもこの政治的孤立性を救はんがためであつた。同盟はこのとき直ちに立つて共に戦ふためではなく、いつかは起るであらう紛争に備へて結ばれたのである。同盟の政治性はこゝに到つて極めて明著となつたと言はざるを得ない。殊に注意すべきことはアテナイはアルゴスとテッセッサリアと同時に

はあるが各個に、それぞれ別に盟結したといふことである。それはこの三國が共同の目的をもつて結びついたのではなく（例へばペルシア戦争に於ての如く）全くアテナイの政治的目的のためにアルゴスとテッサリアとを糾合したものであることを語つてゐる。かくの如き例はその他に多くを重ねることができらざらう。アテナイとマケドニアのフィリップ一世との盟結もそれが兩國の同等なる権利の上に、しかも將來に起り得べき危険に備へて結はれたる點に於て全く政治的なるシユンマキアに屬すると見ることができるのである。

我々は上によつて同盟 (Symmachia) の種々なる形態を見た。之をまとめていへば其の第一は一つの國が苦境を脱せんが爲に他の有力なる國家に結合せんとするものであり、いはゞ國家的なる「惠を乞ふ者」である。第二は例へばペルシア戦争に於いての如く外來の脅威に對してギリシア全土が自覺的に結合した如き場合である。それは自覺的ではあるが尙突發せる外患に對しやむなき必要に迫られて成立したものであり、未だ純粹に政治的なる同盟とはいへない。眞に政治的なるシユンマキアはそれ故に第三に周到なる政治的商慮の下に豫め起り得べき事件に備へて結はれたるものでなければならぬ。このとき締結する兩國が對等の権利の上に立つこともあり、また一方がヘゲモニーを握つて他を併合する場合もあるであらう。

しかし同盟の事實はこの三つの形式を必しも純粹なる形に於て別々にもつてゐるわけではない、却つてそこには種々なる混合があり多くの複雑性を交へてゐることを事實とする。ペロポネソス戦役の勃發につれてその前後に結ばれたる種々の同盟はかくの如き混合體を表示するものとして興味深いであらう。この戦争はツキユディテスも明言するやうに (Think. I. 23) 痛ましく不幸なる戦亂であつた。それは第一に兄弟橋を聞くが如く、

親しかるべき二つの國が互に相争ふた點に於て悲劇的である。それは長き歲月に互つて多くの人命を殞し都市を荒廢せしめたのみでなく、ギリシアの文化を一擧にして衰頹せしめたことに於てさらに悲劇的であつた。しかしツキユデイデスも明論したやうにこの戰の眞因 (Propasis) はアテナイの興隆に對するスパルタの嫉妬にあるとするならばそれもやむなき禍亂であつたと見なければならぬ。それはアテナイ人は勿論スパルタ人も恐らくは意識的に欲せざる戰ひであつた、そこには何ら公明なる目的もなく戰勝に際しても朗大なる喜びはなかつたであらう。それはペルシア戰爭の後に起つた言はゞ國內的なる禍亂であり戰ふ人の心も暗く何故に戰ふべきかの理由についても明かでなかつた。従つてこの戰爭にまつはる多くの同盟も複雑にして怪奇たらざるを得ない。それは多く政治的意味をもつたものであるが公明なる理想を缺くが故に多くの場合權謀的たらざるを得なかつたのである。アテナイはそのためにトラキアの王侯 *Sitaltes* やマケドニア王とも結んだ。スパルタもその同盟圈をなるべく延長してアテナイの力を殺がんとすることに波々とした。それは熟慮せられたる政治の上に立つてゐるがたゞ自己の利益を目的とするが故に同盟は偏奇たらざるを得ない。アテナイと結ぶものはそこに何らか自己の利益の見出さるゝ限りに於てゞありスパルタと盟結するものも亦同様な理由以上に一步も出なかつた。アルゴスはこの戰亂中にコリントスと結んだがその理由は何にあつたか。それは決してこの同盟によつて共に戰はんとするためでなく、この國がスパルタとアテナイとの中間に介在して孰れからもその同盟に入ることを強要せられ、若しそれを承諾しなければ孰れからも攻撃を加へられんとする危機にあつたからしてである。

そもそもペロポネソス戰役の近因 (causa) は周知の如くコリントスとその植民地ケルキュラとの紛争に端を



發するのであるが、この兩國が不和になつた更にその理由はケルキュラとその植民地エビダムスとの葛藤に原因してゐるのである。エビダムスはイオニア灣（今のアドリア海）をギリシア本土の西海岸に沿ふて北上するとき右手に見出さるゝ都市であるが當時政治的な内亂のために救を母國なるケルキュラに求めた。即ちこの市の支配階級が民衆から放逐せられこれらの者は周圍の蠻人と合流して攻め寄せ、掠奪を行ひ、まさに市を荒廢せしめようとしたのでエビダムス人はヘーラの廟に坐り込んで救をケルキュラに哀願したのである。しかるにケルキュラはこの哀願を受諾しなかつたのでエビダムノス人は使をデルポイに遣し神託に訴へ彼等の市の開祖がコリントス出身者であることを理由としてその援助を乞ふた。コリントスにとつてはエビダムスは自己の植民地ケルキュラの更にその植民地であつて孰れにも加擔することが出来ない筈であるが、當時ケルキュラはその強大を恃んでとかく暴慢の振舞が多かつたからして遂にその意にそむいてもエビダムスを援助することに決定した。かくして戦端が開かれたがその第一戦に於ては却つてコリントスの海軍はケルキュラ人の爲に壓倒的に撃破せられたのである。しかしその後コリントスは軍船を建造し海軍力を整備することに餘念がなかつたのでケルキュラ人はこれを聞いて怖れをなし遂にアテナイは往つてその盟邦となりアテナイから何らかの援助を獲得するやうに試みようとした。これを聞いたコリントス人も同時に使は派してアテナイを自己の味方に引入れんとしてそこにツキユデイスが描いたやうに（Think. I. 32-43）兩者の劇しき舌戦が開かれた。それを讀んで何人も感ずるのは利益を中心とする哀願の態度でありその同盟は明かに我々の數へた第一の種類の屬すべきものであつた。ケルキュラ人はいふ、「援助を求めて隣邦の許へ來る人間は、當然先づ第一に彼等の要求するところ

が有利であるといふことを説明すべきであり、或は少くともそれが有害でないことを説くべきであり、そして第二にそれに對して強い感謝の念をいつまでも持つてあらうことを明示すべきである」。さうしてその有利なる條項としてケルキュラがイタリアやシケリアへの航海に好都合な位置を占めてをり、ギリシアの有する三大海軍（アテナイとコリントスとケルキュラとの）の中その二つを糾合し得ることなどが數へ上げられてゐる。これに對してコリントス人も亦種々なる理由をあげてアテナイを味方に引入れんと試みたが遂にアテナイはケルキュラを援助してそれと防守同盟を、即ち何國かゞアテナイ又はケルキュラを攻撃するときは互に援助すべきことを約した。蓋しアテナイはかくすることによつて他日ペロポネソス人と戦はねばならぬとき、彼等が弱くなつてゐるやうに出来るだけ彼等を衝突させて置くことを望んでゐたからである（Thuk. I. 41）。

ペロポネソス戰役の第二の原因はギリシアの東北方に位しマケドニアに近い地狹部にあつたポテイデエアについての紛争であつた。この地はコリントスの移民地であるがアテナイに朝貢しその聯盟に入つてゐたところから、アテナイとコリントスとが不和となつた今は當然そこに紛擾が惹起せざるを得なかつたのである。アテナイは機先を制してポテイデエアに對しパツレネー側の壘壁を破壊し且つ人質を提供せよと命じまたコリントス人が毎年派遣することになつてゐた總督を追ひ拂つて、爾後は之を迎へる勿れと命じたのでアテナイとコリントスとの對立は俄に悪化するに到つた。ポテイデエア人は一方にアテナイと折衝するとともに必要な場合にはいつでも即座に援助が得られるやうにコリントスにも渡りをつけ、さらにコリントス人と共にスパルタにも行つてアテナイが自國を攻略するときはスパルタはアツティカに侵入するといふ約束を結ぶことに成功したのであつた。こゝに

於て戦ひはギリシア全土に擴大してヘラスの二大國アテナイとスパルタとが矛をとつて對峙するに到つたのである。さうしてギリシアの各地はそれぞれ自國の利害からまたは其他の關係からその孰れかに連結して相戦ふやうになつた。スパルタにはアルゴスとアカイア人を除いた地峽内の全ペロポネソス人と、その外メガラ、ポイオテイア、ロクリス、ポーキス、アマブラキア、ケウカス、アナクトリア、エリス等が聯盟し、アテナイにキオス、レスボス、プラタイア、ナウパクトス在のメッセイニア、アカルナニアの大部分ケルキュラ、ザキントス及び其他の朝貢諸都市、即カリヤ地方、ヘレスポントス、トラキヤ地方等が屬してゐた。この間に於て最も注目すべきはマケドニア國の態度であつた。マケドニアはこの戰役の一方の禍亂地、カルキデイケの北方に蟠居する大國であり、その向背は戦局に影響するところ甚大であるべきであつたがマケドニア王ベルデイカスは常にアテナイとスパルタとの間に立つて二重の態度を取りつゝあつた。そして或時はアテナイに反しカルキデイア人を助け、或時はアテナイに組して反亂軍を征討した。彼は従來はアテナイの盟友であつたが後に敵になつたのである。その理由として擧げられるのは、アテナイが彼に敵對してゐた兄弟ヒリツポス及び従弟デルダースと同盟を結んだためであるといはれるが (Thuky. I. 57) 後にギリシア全土を征服するに到るマケドニアの潛勢力は既にこの時代に於て孕まれてゐたといへないであらうか。ベルデイカスは即ちこの戰亂に際して最も巧妙なる外交によつて徐に自己の國力を培養することに努めたのである。その接壤國であるトラキヤを手に入れば勝利の疑ひなきを看破してスパルタの將 Brasidas をつて Amphipolis を攻略せしめたのも彼れであつた。アムピホリスの陥落によつて貶けられたのは歴史家ツキユデイデスでありアテナイはそれによつて敗戦の憂目を見たが、世界は不朽

の歴史家を拾ひ得たといはれるのもこの戦に於てである。孰れにせよ我々はペルデイカスに於て第三の全き政治的なる國際關係が見出され得ることに注意せねばならぬであらう。彼が時にアテナイと結び、時にスパルタと聯合したのは全く政治的なる立場に於てであつた。それは弱小なる自國の危機に臨んで倉皇として他の援助を乞ひそれと聯盟するのではなく、將に來らんとする情勢に應じて徐ろに政治的工作をめぐらした聯盟である。ペロポネソス戰役に於て我々が聯盟の三つの形態を見得るといつたのもこの意味に於てであつた。エピダムノスがコリントスの援助を求め、ケルキュラがアテナイの助力を乞ふて聯盟したのは第一のヒケテース的なる國際關係であらう。ギリシアの諸國が或はアテナイに結び或はスパルタに組して鎬を削つたのは聯盟の第二の範疇に數へ得るものといはねばならぬ。そこにはたゞやむなき外的事情によつてではなく利害に基く自覺的なる商慮が働いてゐるからである。第三に到つてはその孰れにも加擔することなく、従つて隨時に孰れにも結合し得るところのマケドニアの態度であり、それはそれ故に純然たる政治的聯盟であるといはねばならない。そして最後にギリシアを支配し統一さへしたのはマケドニアであつたことを思へばこれら三つの間國家的關係が互に如何に位置つけらるべきかも明かとなるであらう。マケドニアはペルシア戰役に「ギリシアの友」と呼ばれたアレクサンドロスに前に有し、ギリシア全土は勿論當時の世界全體を打つて一丸としたアレクサンドロス大王を後に持つた國であつたのである。

都市國家の相互關係については第一に諸都市間の通商の經濟的關係が考察せられ、次にこれらの政治的乃至は爭霸的關係が討究せられねばならなかつた。一は平和的であり他は戰爭的であるが二者は決してこの順序に交替するのではない、むしろ通商に先立つて戰が行はれ、戰ひによつて通商の道が開かれ、これらは互に交差して複雑なる國際關係を形づくるのである。そしてその混合として掠奪的行爲があり海賊も蔓つたわけであるが、時代の進むに従つてそれらは正當なる商行爲と正義なる戰爭とに置き換へられざるを得なかつた。我々は茲に於て初めて正常なる國際關係を云爲することができるのである。そしてそれらを通じて見出さるゝのは一つの國と他の國との相互的なる關係である。ポリスはこの關係を辿つてやがてコスモポリスにまで進まざるを得ぬであらう。我々の問題はポリスの成立を研究してそこに到達するにあつたが尙一つの殘されたる仕事はギリシアの諸都市とその植民地との關係を考究することである。ギリシアの植民地は近代のそれとは異り特色ある存在と意義とをもつてゐた。それは母國の植民地ではあるが決してその屬領ではなかつた。それは母國に對して他國ではないがしかも一つの獨立する都市をなしてゐた。そして通商の行爲もこの植民市を尖端として行はれ、國と國との戦ひも植民地の關係に因することが多かつた。殊にペロポンネソス戰役の先後に於ては我々が既に見たやうに、植民市の問題は頗る重大なる意義をギリシアの歴史に於てもつてゐたのである。ケルキュラはコリントスの植民市であり、エビダムスはさらにケルキュラの植民市であつたがそれらの間に醸された紛争が遂にギリシア全土に互る禍亂の原因となつたことを思へばギリシアの植民地がそもそも如何にして起り、如何なる機構をそれ自らに、またその母國に對して有してゐたかが問題とならざるを得ぬのである。

ツキユディデスは植民の一つの原因として「彼等（ギリシアの海軍）は殊に十分なる領地を有たないとき船を向けて島々を襲うて征服するやうになつた」と言ひ（*Thuk. I. 15*）プラトンも人口の増加やそれに類似した必要に迫られて植民の起ることを述べてゐる（*Platon Nomoi 708*）。ギリシアの植民が土地の必要から起つたことはその地理的情勢からも明白であり自然的條件から必然でもあるがしかし我々のこゝに嚴密に區別せねばならぬことは、例へばドーリア人がペロポネソス半島に侵入し移民したこととコリントスがケルキュラに植民地を設けたこととの異同である。前者はいはゞ自然的なる民族の移動であるが、後者は都市國家の自覺的なる構成によつたものもある。その動機が共に人口の増加や食糧の不足にあるとしてもその構造は決して同一ではない、また前者が比較的早き時代に行はれ後者が後の時代に屬するといふ單なる時間的觀點によつても規定し得られないものである。そして我々のこゝに問題とするのはいふまでもなく後者の政治的なるまたは歴史的なる植民市についてであつた。

政治的植民市の成立に於て本質的なるものはしかし何であつたか。それは第一に近代の植民が漸次的であり、又は部分的であるに反してギリシアのそれは一舉的であり全的であるといふことであらう。勿論古代に於ても民族の發展は漸次的であり新しき領土の發見も突如として起つたものではない。しかし植民市の建設は指導者によつて導かれ、一定の移住民によつて行はれた一舉的なる事業であつたのである。そこには常に一人の指導者があつた。それは普通に *oikistes* と名づけられ、各市はそれぞれなるオイキステースを有つてゐた、ツキユディデスは第六卷の初めに此等多くの建設者について語つてゐる。例へばシラキュサの建設者は *Archias* であり

Naxos の名祖は Thuclos であり、カタニアはその建設者として Eryachus をあげてゐる。Colia 市が二人のオイキストを即 Antiphennus from Rhodos と Eritimus from Crete とを有つてゐるのはこの地がロードスとクレータから移民したことをあらはすものに外ならぬであらう。ケルキユラのオイキストは Chersiorates であるが、エビダムヌスのそれは Phalrus であつた。さうしてこの人はコリントス人エラトクレイデスの子であるから或植民地がさらに自己の植民地を作つたときその建設者を自己の母國から乞ひ受けることが當時の習慣であつたことが知られるであらう。植民とはたゞ冒險的なる人民の烏合の移住ではなく、一定の指導者によつて一定の土地に移し植えられた都市國家の建設であつた。一言にしていへば植民市 (*antoria*) は最初から一つの都市國家 (*polis*) をなしてゐたのである。植民市の住民は普通には一つの母市からの移住者より成つてゐるが時として多くの土地から集つた混合民から成立つてゐる場合もあつた。例へば Oyno はカルキス人とエウボイア人とから成り、トラキアの Ossa はエレトリア人とアンドロス人から、シケリアの Himera はザンクルから來たカルキデア人とシラクサから遁れたドーリア人とから成立つてゐた。しかしこれらの人民が假令複合してゐても之を政治する力はあくまでも最初のオイキストの手中にあつて時としては一人のオイキストが二つ以上の植民市を支配することさへもあつた。ギリシアの諸都市がそれぞれの名祖によつて建設せられ、それによつて守護せられてゐたやうに、その植民市も最初からそのオイキストをもちそれによつて支配せられてゐたのである。このことはギリシアの植民市を近代のそれから區別して特色づける一つの本質的なるものをなしてゐる點から見ても就中重要である。近代の植民地はそれが如何に發展し繁榮を極めても依然として植民地であり本國の屬領である

が、ギリシアの植民市は最初から一つの自主的なる都市國家をなしてゐた。それが *κτεονικία* であつて必しも *ἐποικία* でないことはギリシアの植民地の注目すべき特色をなしてゐる。エポイキアは假令故郷を離れて異國に居住しても常に故國との關聯を失はぬものであるが、アポイキアはむしろ本國を離れてそれ自らに獨立し最初から一つのポリスを形づくるところに特色をもつてゐる。さうしてギリシアの植民市はアポイキアであつた。ギリシアでは故國を離れて植民地の市民となるや母國の市民權を喪失するのが普通であつた、ケルキエラ人はアテナイに到つて次の如き言辭を臆面もなくのべてゐる「凡て植民地といふものは好くとり扱はれるはその母國を崇めるが、不當な仕打ちをうければ疎遠になるものである。何となれば彼等は國に残されてゐる者に對し奴隸としてではなく、同等なる資格に於て送り出されてゐるからである (*ὅτι γὰρ ἐστὶ τῷ δουλοῦ, ἀλλ' ἐστὶ τῷ ὀμοῖον τοῖς κτεονικίοις εἶναι ἐκτεῖνονικίαι.*) (Thuk. I. 14)」。ケルキエラはその母國コリントスに對してかくの如き態度に於て立つてゐた、さうしてそれはまたギリシアの多くの植民地の母國に對する態度でもあつたのである。小アジアの海岸にあつたイオニアの諸都市は多く植民地として起つたのであるが、我々は彼等の母國を辨へないほどにそれぞれ獨立なるポリスとして發達した、否却つてギリシアの文化は先づこれらの植民地に發祥したものであることを思へばこれらの植民地の有したポリス性の如何なるものであつたかは推知するに難くはないであらう。ケルキエラがコリントスと事を構へるやうになつたのもこの自主性に基いてゐる。ツキユデイデスはコリントス人をしてアテナイに於て次の如く言はしめてゐる。「我々とてもケルキエラ人から侮辱されるために彼等を植民させたのではない、むしろ彼等のヘゲモンとなり彼等から相當の尊敬をうけんがためにさうしたのである。ケルキ



ヌラ以外の他の植民地は少くとも我々を尊敬し、我々はその植民地から他の孰れの母國にもまして愛せられてゐるのである」(Think. I. 38)。コリントスはギリシアに於ても最も早く多くの植民地をもち、また植民政策についても最も苦心を重ねた國であつた。殊に Cypselidai の治下にあつては自由主義をとつて少くともケルキュラ以外の諸植民地——Chalcis, Solium, Anactorium, Lencas, Apollonia, Amphiroia 等からは愛せられてゐた。キプセルスの子は Gorgos はアムブラキアのオイキストとなり、二人の庶子 Pyrales と Echinos とはレウカスとアナクトリウムの名祖となつた。ケルキュラでは Perander の三人の息子が總督となりポティダエアにも彼の子 Eurygoris が總督となつた。これらを見てもコリントスが一方に諸植民地を如何に自己に近くひきつけて置かうと努力したかゞわかるであらう。にも拘らず植民市は決して母國の屬領地ではなかつた。さうしてそれがさうでなかつたことは時代の特殊なる情勢によつてではなく寧ろ植民地の本來的なる性格に屬してゐたのである。ギリシアの植民地は語の十分なる意味に於て一つのポリスであつた。殊にそれがケルキュラの如く強大なるものに到つては優にその母國と對立し遂には抗争し得るだけの實力をもつてゐた。ツキユデイデスの傳ふところによればケルキュラは戦争の始め百二十艘の三段櫓船をもつてゐたといふことである (Think. I. 3)。そしてそれがギリシアに於て益、多くのポリスを併立せしめる所以となり、またそのためにギリシア全土を痛ましい擾亂に陥れた理由ともなつたのである。レウカスとアナクトリウムは前述の如くもとはコリントスの小さき植民地であつたが四世紀頃には母國から全く獨立してアカルナニア同盟の一員となつた。時間と距離との遠隔によつて殆んど凡ての植民地は母國から遠ざかつたが、たゞこれらを結びつけるものとして残つたのは宗教的情緒であつた。

我々はポリスの間の關係を表すものとして最後にこの點を明かにしなければならぬ。植民市が政治的に母國から全く離脱しても尙之らを繋ぐものとして宗教的情念が残つてゐる。彼等の祭祀は多く母國の使者を待つて行はれた。コリントスがケルキュラの暴慢を憤つた理由の一つとして彼等の共同の祝祭に於て慣例になつてゐる特權を興へなかつたことがツキュラデイデスによつて書き殘されてゐる (Thuk. I. 25)。各植民市のオイキストは前述の如く母國の市民であり、彼れの死するやヘーローとして祭られ、種々なる競技がそのために捧げられることを常とした。この祝祭を怠ることは何にもまして母國への反逆と考へられた。アムプイポリスの人はアテナイから離脱するために先づ *Hägonon* の廟を破却し改めて *Prasias* をオイキストと祭つたと云ふ (Thuk. V. 11)。*Phurii* 市がデルポイの神を祭るやうになつたのもそれが孰れの屬領でもなす一つの獨立國たることを表明せんがためであつたといはれる (Diod. xii. 35)。

神を中心とする聯盟の最も古く且つ廣汎なるものにデルポイの *Amphitromie* がある。それは文字通に神を中心としてその周圍に住むものの連結であつた。しかしそれはポリス的であるよりもむしろそれ以上の或は少くともそれ以前の聯盟を意味する。神聖同盟の盟邦は *ἑθνεῖς* と呼ばれポリスとは考へられなかつた。デルポイの神聖同盟は十二のエトネーから成立ち、イオニア人もドーリア人もテッサリア人もポイオチア人もそれに屬してゐた。マケドニアは之に加らなかつたが (フィリップ二世は三四六年以來個人の資格をもつて加入した) その他ギリシアの主なる國々はそのエトネーであつた。さうして假令この同盟に加らない國でもデルポイはギリシアの *temenos* として諸方から神託を乞ふべく蟻集した土地であつたことは有名である。それ故にそれはポリスの

神であるよりもむしろギリシア全土の神であつた。デルポイの祭神はアポロンであるがそれは如何なる起源をもち、または何をその本質としてゐたか、一説の如くそれはドーリアの *arekha* から轉化したものであり「會合」を意味するところからしてそれ自らに社會的なる又は政治的なる結合を表はすといはれてゐる。しかしフアネルも論じたやうに *arekha* から *Arékhon* (*Arókhn*) といふ長音に轉ずることは言語學的に困難でありそれからマケドニアやデルポイに於て用ひられた *Arékharios* (月の名) が轉化し來ることがむしろ自然であらう (Ehrnell, *The cults of the greek states* vol IV, p. 98-99)。アポロンの信仰は北方からヘラスに侵入した民族と共に齎されたものであり、その傳播の経路は *Pempe* からデルポイに通ずる聖なる道であつたといはれる。それは *Hyporhoreans* の、即ち北風の彼方に住む人々の信仰であつた。否 *Hyporhoreans* とは必しも北方の蠻族ではなく、アーレンスが明かにしたやうにそれは *Tréphopos* と同義であり、(なぜなら北方ギリシアでは *β* と *φ* とは混同して用ひられたから) 穀類の供物を市から市へ傳へ運ぶ神の使者を意味し、ヘロドトスの *ἡ Τρεφώσας* と同一であつたかもしれなし (Ahrens: *De Graec. Ling. Dialect. I.* 34r.)。ヘロドトスは麥の蘘苞に包まれた神への奉納品が如何にして北方から搬ばれ先づスキウタイア人の許に到着し、ギリシア人として是を最初に受取つたドナ人から傳へ運ばれ遂にデロスにまで到達したかを興味深く記してゐる (Horo. I. IV. 33)。マケドニアでは *Tréphobestarios* とは一年の最後の月を指しそれは收穫の季節に當つてゐた。アポロンの信仰は恐らく北方民族に起源し、或はドーリア人のペロポネソス半島侵入に伴つて、或はイオニア人のアツテイカから海外への發展に従つて南方に搬ばれ傳播せられたものであると見るべきであらう、前者の途上に於て建設せられたのが

デルポイの神殿であり、後者の航路の中心として見出されたものがデロスの神域であつた。ドーリア人の信仰したアポロンは *Apolloon Thōbaieis* 又 *Kápuoros* とであり、メッセイニア人のそれは *Apolloon Kapuōros* であるがしかしこれらは既に北方の *Dryopian* や *Myrian* 等の民族に於て所有せられてゐた信仰であつたといはれる。デロスを中心として小アジアの諸都市例へばミレトスに於て祭られたものは *Apolloon Delphinios* である。そしてそれは海豚の形を取つた神であり明かに航海の安全を護る海神であつた。ミレトスではこの神の廟は獅子灣にのぞむブローラーに立てられ、早くから國家の祭神として崇められた、それがアリーのいふ如くクレータから來たか (*Aly.*: *Delphinios Klio XI*) またはアテナイに關係をもつものであつたかは別問題であるとしてもこの神の崇拜が海上の商業國に於て見出され、航海の安全を護る神であつたことは明かである。クレータでは *Milatos* に於てこの神が祭られてゐた。この點からミレトスがミラトスによつて建設せられたと結論することは速断であるが、これらの航海國に於てアポロンが一般にその祭神であつたことだけは確かであらう。

これに反してアエオリア地方やトロアドに於てはアポロンは *Sminthia* として祭られた。それが何を意味するかは問題であるがアエオリアの地方語として *smnthos* は鼠を意味し、*Apolloon Sminthens* は農作物を荒らす野鼠の害を追拂ふ農神であると解せられるのが普通である。トロアド地方にはイリアッドの作られる以前からこの神の信仰があつたことはホメロスがトロイを *Tanēdos* とともにアポロンの庇護地と考へたことによつても證せられるであらう。恐らくこの地方が小アジア北部の農耕地であり、野鼠の害に悩まされることが多かつたがためにこの神がそれらからの守護神として祭られるに到つたのであらう。アポロンはもともと農耕の、または森

の神であつた、*Apollon líkaios* (*líkaios*) は狼に關係があり、或はアポロン自身が狼から生れたとか、それによつて養はれたとか、狼の形をとつて戰つたとか種々に物語られるのであるがスキュオンのアポロンの殿堂には狼が犠牲獸として選ばれたことがパウサニ阿斯によつて傳へられてゐる (*Paus. II. 9*)。それがローマに於ける如く *wolf-tribe* の傳説を表はすか否かは別問題としてアポロンが獵獸を主とする未開民族の信仰に發源することだけは明かであるであらう。さらに *Apollon Nómios* は土地を耕し羊を牧する農人の神であつた。ナクソスではそれは羊の神として表はされ、アルカディアに於ては *Apollon Keésáras* として一般に角ある獸の神と考へられてゐた。アポロンが牧場の主なる *Aristaios* と混同せらるやうになつたのもこの理由によるのであらう。デルポイでは穀物の保護者として *Verákas* と名づけられた。アポロンはそれ故に一方に農耕の、他方には航海に就ての守護神と考へられたのである。さうしてこれらを通してアポロンの支配するものは民族の移動と植民地の建設とであつた。 *Apollonios* とは即ちこれを意味するのである。蓋し民族の移動と植民とは耕地を求め、航路を開拓することを第一歩としてゐるからである。茲に於てアポロンは都市の建設者となり、植民地を構へ、家庭を作る神 (*Oikistês kai Daimonistês*) ともなつた。都市の創立者として *Apollon Dairios* 即ち父なるアポロンと呼ばれたのは特にアテナイに於て々あつたことも茲に注意せられてよいであらう。プラトンによればアポロンは *Arólouos*, から來たものであり「破壊者」を意味するといふが (*Platon Krat. 405*) 何を却け何を破壊するのであるが。クラテイロスの解釋は勿論語源的に正しいといへないが、アポロンが屢々 *Metákratos* とよばれたのは惡を却け善をとつてそこに何ものかを建設することを意味してゐるにちがひない。パウサニ阿斯によればア

テナイのクラメイコスの前に建てられたアポロンはまさしくこの Alexikatos であつたといふ。森の、または狩獵の神であつたアポロンは今や都市の神となつた。Apollon Puthios が即ちそれである。政治を司るものは命令するものであり指導するものであり就中豫言するものでなければならなかつた。デルポイのアポロンがピュティアを通して豫言者として立ちあらはれ、乃至は託宣するものとして力をもつに到つたのもこの理由によるのである。アポロが豫言者として信仰されたのは遙かにテルポイ以前に溯らねばならぬであらう。アエオリスでもリュキアでも彼は託宣の神として早くから信せられてゐた。ゼエウスは最高の神であり自らも人民に話しかけるが——例へばドドナやオリュムピアに於ての如く——それは力をあらはしても必しも智慧を示してゐない、託宣の中心はしかしながら智慧にあつた。アリストテレスによつて傳へられるやうにアゲンポリスはそれ故に或事についての神の意志を、最初はオリュムピアのゼエウスにきいたがやがてデルポイのアポロンに問はざるを得なかつた (Arist. Rhetik. 1358<sup>b</sup>)。イオニア人は信仰的であるよりもむしろ懐疑的であり、早くから哲學をもつてゐたのであるが、それにしてもアポロンの信仰はそこに於ても頼れはしなかつた。ミレトスの近くに Brachonitai があり、コロポンの近所に Klaros があり、孰れも神託の問はるべき場所として古くから知られてゐた。

我々は以上の事實を顧みることによつて次の如く考へることができらう。アポロンの信仰はそれ自ら全ギリシア的でありパンヘレンステイクではあるが各都市に祭られたるアポロンは必しも同一ではない。既にデルポイのアポロンは主としてドーリア人によつて尊信せられ、イオニア人のアポロンはデロスに於て祭られてゐ

た。アポロンにデルポイ的とデロスのとの區別のあることが第一に注意せられねばならぬ。況や各都市に於て祭られたるアポロンはそれぞれなる都市の性格を擔ひ地方的なる個性によつて隔てられてゐる。パウサニアスは「希臘紀行」の中にアポロンの別名 (epithet) を數へること五十八回に及んでゐると云ふ (Jones: Introduction to Paus.)。農耕の神と云つては Apollon Smintheus となり航海の守護神と云つては Delphinios と名づけられた。勿論これらもアポロン其自らとして一面に共通の性格を有するのであるが具體的なる信仰としてはむしろそれぞれるなるアポロンが區別せられてゐた。神の屬性はその種々なる性能をあらはすよりもむしろそれぞれるなる異體性を示してゐると考へられねばならない。神はたゞ一般なるものとしてではなく、それぞれなる神として信仰せられてゐたのである。ことに唯一神教的であるよりも多神教的なるギリシアに於てはこのことが著しい。母國としての植民地とが信仰を一にし儀禮を等しくするものもこの具體的なる神に結びつくことによつてであつた。Apollon Delphinios の信仰が如何なる經路をとり何處に發展したかを追ふることによつて我々は海商國としての其國の性格を知ることができる。例を小アジア西海岸のイオニアの植民地にとらう。ミレトスは Neleus によつて建設せられ、その子孫がこれを統治してゐたが前六三〇年頃 Thrasylus がテイラニスになつてからこの制度とデモクラシイとが交互に連続した點に於てアテナイと酷似してゐる。ミレトスに祭られた主なる神がアポロン、デルパイニオスであつたことは前述の如くであるがこの神の祭祀はアテナイと略同じ月に——それはアテナイでは Minycheion とよばれミレトスでは Tauron とよばれた——行はれた。クレタに於ても同様であるところからしてミレトスはクレタの植民地であると論ずる人もあるが、むしろこの神は凡てのイオニア人に共通のものであつたと考ふべきであらう。ミレトスに於て第二に尊信せられたのは Apollon Dydimaios であつた、それは前述

の Branchitai のアポロンであり恰もデルポイに於ての如く神託を與へる神であつた。ミレトスではまたボセイ  
 ドンやアテナも祭られたがアポロンの信仰が壓倒的であつたことはこの外に Apollon Ulios, Apollon Lukeos  
 等のあつたことを見ても分るであらう。ミレトスの植民地は Apollonia, Pontica, Odessos, Tomis, Istris,  
 Kizikos 等から Dioskurias (今之 Sebastopolis) 及 Sinope に到る北方にまで及んだが、アポロニアがアポロ  
 ンに因んで名づけられた都市であつたことは勿論、此等の多くはアポロンの信仰を中心として成り立つてゐた。  
 Kizikos の市はアポロンを *Ioziptens* として祭るのみでなく市民の祖先をこの神にまで及ばさうとしてゐる。  
 これらの都市に行はれた貨幣に多くアポロンの像が彫まれてゐることもその一つの證左として擧げられてよいで  
 あらう。シノペがアポロンによつてポイオチアから奪ひ取られた市であるといふ傳説はこれらの植民地の建設にア  
 ポロンが如何に大なる役目をもつてゐたかを示すものといはねばならぬ。ミレトスはイオニア人の都市であつた  
 がそこには多くの非イオニア人を、例へばカリア人の如きギリシア以外の人種をも交へ、ギリシア人の中にもテ  
 ツサリア人の血を多く雜へてゐた、ミレトスの建設者ネレウスはもとテツサリアの *Tolios* から出た人であつた  
 がその兄弟の *Palios* に追はれてメッセイニアに免れさらにミレトスに移住した人であるともいはれてゐる。こ  
 れらの異民族が集つてもかく一つの都市を建設することは血の結合にもまして宗教的なるものが支配的であつ  
 たといはねばならぬであらう。コリントスの *Ennealos* (七世紀頃の人) の記載によればシノペはポイオチアの  
*Asopos* の娘であつたといふ、それがミレトスの植民地となつたのはアポロンの力によつてであり、加之ボセイ  
 ドンやゼエウスが之を助けたといふのも宗教の信仰が諸民族を統一して一つの都市を建設せしめるに如何に力が  
 あつたかを表したものに外ならぬであらう。



小アジアに近く多くの植民地をもつてゐたのはサモス、パロス、テオス、コロポン等であるが、それらの母國及び植民地の信仰は何であつたか、サモス島は *Phoikos* の建てたヘラの殿堂によつて有名であるがアポロン、ピイテイオスも祭られてゐたことはツキユデイデスの次の記事によつても知られるのである。「サモス人の僭主 *Polyrkes* は海軍力によつて強大となり爾餘の島嶼にも君臨すると共にレネイアも掌中に収めた上、これを鎖でデロスへ縛りつけて、アポロンに獻納したといふからゐである」と (*Thuk.* III. 104)。パロスの主神はアポロン、テリオスであつた。テオスの植民地の中有名なのは *Abdera* であり、そしてそこではディオニュソスが主神であつたやうであるが、アポロンの信仰もなくてはなかつた。コロポンに於ては *Apollon Klaros* が祭られそれと併せてディオニュソスが尊信せられた。Chios についてはツキユデイデスが如何にしてレスボスにあつたアテナイ人がキオスに渡り、之を占領して市から遠からぬ地に *Delphinium* を構築したかを記載してゐる (*Thuk.* VIII. 38)。我々はこれらの諸例を北はアムパイポリスから南はシケリアに到るまで多くのイオニアの植民地に於て限りなく重ねることができらうであらう。しかもこれらを一貫してそこに見出さるゝのはアポロンの信仰とその儀禮とであつた。一つの都市は必しも一つの民族によつて作られたものでなく、時として多くの異民族を交へることもあるが、それらをして一つの國家たらしむるものは却つて宗教の力によつてであつた。ギリシアの植民地は近代のそれとは異り、單なる屬領ではなく常にそれ自らに一つの國家であり、従つてやゝもすれば母國から分離する傾向があつたのであるが尙も母國との關係を斷ち切らせないのは宗教の力であつたといふべきであらう。デルポイのアポロンは汎ギリシア的であるがデリアン、アポロンは特にイオニア的であつた。そしてそれを代表するものは *Apollon Delphinios* であり海洋の神であつたのである。(完)